

同窓会便り

発行
 東北大学 電気・通信・電子・情報同窓会
 仙台市青葉区荒巻字青葉
 東北大学工学部電気系学科内
 発行責任者
 佐藤利三郎
 (題字 佐藤利三郎会長)

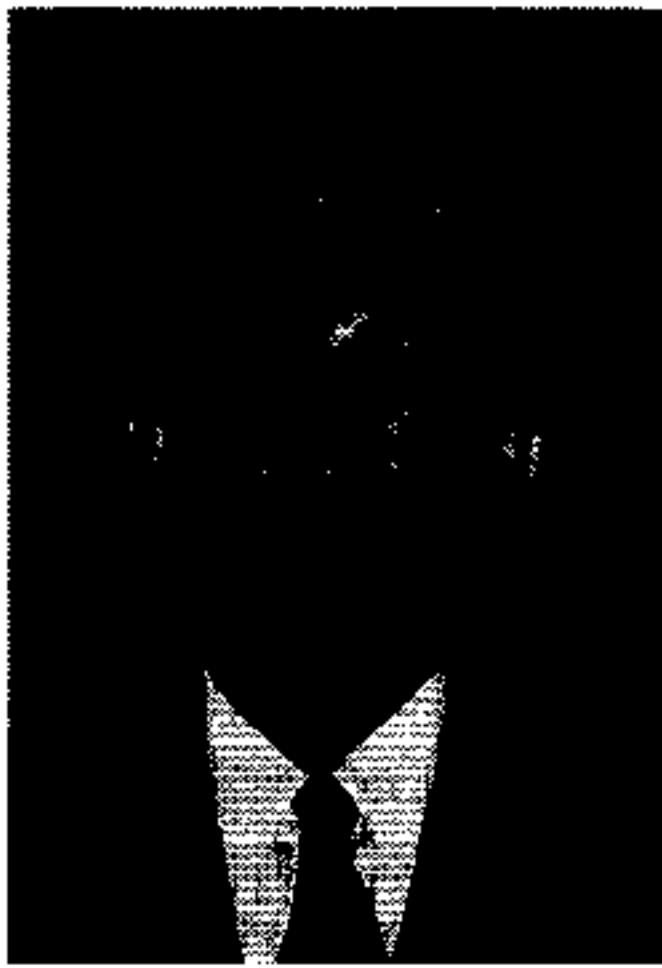
会長挨拶

世界への道を進む 同窓会

会長 佐藤利三郎

平成十年を迎え、同窓会会員の皆様には益々御健勝のことと御慶び申し上げます。さて、平成九年に行われました恒例の行事を御報告致します。

平成九年二月七日(金)仙台ホテルで第八回「産官学フォーラム」が開催されました。まず、東北大学総長を退任された西澤潤一さんから「総長時代をふりかえって」ー教育・研究のあり方ーの特別講演がありました。ついで、「二〇〇〇年に向けての大学研究・教育のあり方について」のテーマで産学官それぞれの立場からの講演、討論が行われ、続いて恒例の懇親パーティが行われました。平成九年三月二十五日(火)東北大学卒業式、午後一時三〇分電気情報系一〇一教室で祝賀会並びに同窓会入会の歓迎会が行われ、学部卒



業生二六六名、大学院修了生四十四名の新同窓会員を迎え、これにより、当同窓会員は正会員九六五三名、旧現教官の特別会員一二六名、その他会員四名合計九七八三名となりました。

平成九年九月十二日(金)午後四時より学生会館において、同窓会本部総会並びに東京支部総会が開催され、母校の近況と行事の報告に続き、松下通信工業株式会社、女子駅伝監督の横溝三郎氏による「私とスポーツ」の特別講演がありました。会社の仕事を持った部員が、練習に励んで優秀な成績をあげてゆく指導方針には、深い愛情と心のふれあいの豊かさを感じ、一同に深い感銘を与えました。支部総会も活発で、平成九年三月三日(月)仙台ガーデンパレスで東北支部、平成九年七月四日(金)ホテルサンルート名古屋で東海支部のそれぞれ総会が行われ盛会でありました。また平成九年十一月十四日(金)学士会館で渡邊肇先生の御生誕百年記念会が盛大に行われました。

世界情勢は益々見通しのむずかしく、昨年もあれこれと道を探すことに暮れました。しかし、情報化の流れは衛星通信技術、光通信技術、放送技術が急速に発展し、さらにコンピュータを中心とするデジタル技術の発展によって、情報基盤が整備され、二十一世紀

母校に望む

副会長 城戸健一

の情報化社会を形造ってゆく、その結果ポータル化が進んでゆく、あらゆる境界がなくなる、文化、経済、社会のすべての面での人種、業種、国境を超えてダイナミックに展開されつつあります。これは不安定な状況でこ

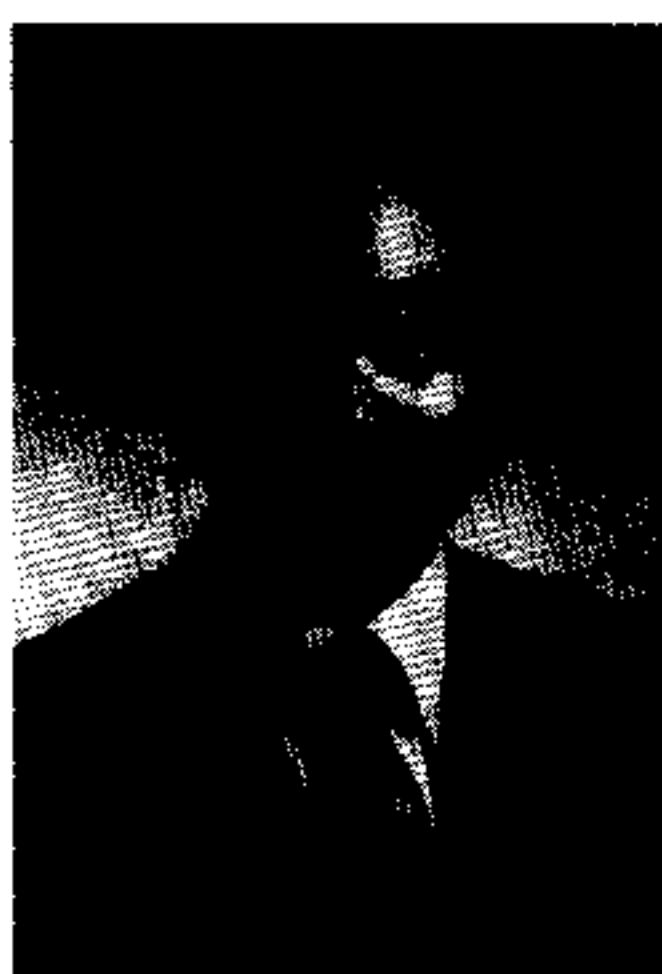
こしばらくは続くのでしよう。本同窓会もこの流れの中で、八木、抜山両先生以来の伝統をもとに、世界に貢献すべく、新しい道(研究、教育)を求めて活動するよう期待する次第であります。

平成十年を迎え、同窓会員の皆様には、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、早いもので、私も定年退官から七年を経過しましたが、その間に、私学と企業に属して、母校を外から眺めることができしました。この期間の経験を母校にフィードバックする責任を感じています。それには、この文書は場所として不適切かもしれませんが、同窓の皆様にも読んでいただきたいので、この場を借りることにします。

仙台を離れて以来、母校に対する思い入れは一層強くなるばかりです。私の考える母校とは、仙台のキャンパスだけではありませぬ。全国、いや全世界に広がっている同窓生すべてが、わが母校の構成員であります。

この七年間は、我が国ではバブルが崩壊し、価値観が動揺した期間でありました。恐らくはそれに触発されたと思われる多くの議論が、大学のあり方、教育のあり方について交わされてきました。そんな議論が行われる理由、その背景になる我が国の大学の実状に



は、東北大学の中から見ただけでは理解し難いものがあります。外に出て見るとなるほどと思うことが多く、それが私の意見の根拠にもなるのですが、それを書きたてることには差し障りがあるかもしれません。幸か不幸か字数の制限もありますから、ここではそれを省略します。

教授は研究ばかりしていいので、学生の教育にもっと力を注がなければならぬという、大学のあり方に対する議論があります。が、私は、それには絶対に反対です。大学におられる先生方には、大いに研究をしていただきたい。研究の厳しさを、身をもって示していただきたい。学生は、その先生の姿を見て、自ら育って行かなければなりません。極論すれば、教える必要はありません。一生懸命に教えて、失敗した経験がない代わりに自分の考えで行動できない学生をつくって何になるでしょうか。失敗の経験が必要です。そして、先生を見習わせることが、一番の教育です。

わが母校の発展のためには、やる気のある後輩を迎え入れたいものです。今は、志望大学を決める基準がおかしな数値になっているようですが、正しい判断が行われるように、社会に大学を知らせるべきです。そのためには、在籍する教官・学生のみならず、キャンパスを離れた構成員が、それぞれの立場での仕事を通して、わが母校の存在を示すことが必要です。卒業生が社会で活躍することが、いちいち大学の名をあげなくても、そのまま大学の評価に繋がるものと信じています。これは、われわれの先輩の実績でもあります。

特集

大学院社会人特別枠とその役割

星宮望

(東北大学評議員、電子工学専攻)

社会人博士課程学生を引き受けて

大見忠弘

(電子工学専攻)

東北大学工学部・大学院工学研究科の大学院重点化整備(平成六～九年度)ならびに情報科学研究科の創設(平成五年度)における特徴の一つに社会人特別選抜(博士課程の前期・後期)がある。現在の日本社会は、これまでのように「欧米に追いつけ、追い越せ」といったことでは済まなくなつて、真に独創的なものを生み出すことが問われる時代に入っているといえよう。そのためには、企業・官庁をはじめとする職場で現役で働いている社会人に、高度な知識の学習の機会と研究に携わる機会を提供し、変化の激しい現代における職業人としてのレベルアップを図ることが重要であろう。一方では、一般の大学院学生にとつても、すでに社会人として現役で仕事をしている人が目的意識をしっかりと持ち、一緒に研究に従事することは良い意味での大きな刺激になることが期待される。

すでに社会人特別枠で博士課程後期に多くの入学を受け入れてきている。ある程度予想したことはあるが、前期課程の希望者が少なかった(工学研究科の電気系で四年間に二名、情報科学研究科の電気系で五年間に四名)が、その一方で、後期課程の希望者が多かった。一般の進学による後期課程学生が定員に満たない現状を埋めるかのように大幅に定員を越える応募があり、多数の入学を受け入れた。実績は次のようになっている。

「電気・通信工学専攻、電子工学専攻」
平成六年度：三〇名、平成七年度：二二名、平成八年度：一五名、平成九年度：一九名

「情報基礎科学専攻、システム情報科学専攻」
平成五年度：五名、平成六年度：二名、平成七年度：五名、平成八年度：三名、平成九年度：九名

ここで、特徴的なことは、①入学試験では、いわゆる筆記による学力試験を行わずに、修士論文あるいはこれまでの研究の内容に関する審査と面接を主として選考すること、②すでに十分研究業績があったとみなされた人に対しては、入学後に研究業績について専攻毎の審査を行って、在学期間の短縮を実施していること、③後期課程では、社会人が講義を受けやすいように夏期に集中的に講義を用意していることなどがあげられよう。②については、最短では二年間の短縮によって一年で博士の学位取得が可能である。すでに下記のような多数の期間短縮による学位取得者を出している。

「電気・通信工学専攻、電子工学専攻」
平成七年三月：二名、平成八年三月：二名、平成九年三月：七名、平成一〇年三月：九名(予定)
「情報基礎科学専攻、システム情報科学専攻」
平成九年三月：一名

大学の使命は、教育と研究にあると言われ続けているが、かつて欧米先進諸国に、追いつけ追い越せの時代には、圧倒的に教育の比重が高く、優秀な技術者を数多く生産現場へ送り出す学部中心の大学運営で十分であった。しかし、欧米から進んだ学問・技術を導入するだけでなく、わが国からも世界の進歩・発展に寄与する学術・文化・芸術等の発信が諸外国から求められるようになった今日においては、新しい学問・技術創出の基地ともいべき大学の機能強化が求められるのは当然である。研究と教育を同一

の比重で展開する大学院重点化である。一九九四年四月工学部の先陣を担って電気・通信工学専攻及び電子工学専攻は大学院重点化されたが、この年から社会人博士課程学生の受け入れが可能となった。これまでに二十六人の社会人博士課程学生が筆者のもとへ入学し、二十一人が卒業している(一九九八年三月卒含む、在学中五人)。世界規模での大競争時代を迎えて、産業の国際競争力強化、科学技術立国が本格的に求められる時代に完全に整合する制度の導入である。

博士学位論文をまとめる作業は、関連する学問・技術分野の背景と状況の把握、その分野に現在もなお存在する克服されるべき重要な問題点の理解と、課題の設定、課題が達成された時の波及効果の認識、課題を克服するための具体的手法(新しい技術や実験方法等)の考察と実施、得られた結果の解釈に基づく新たに提案した技術・手法等の有効性の実証、等々学問の原理原則に基づききわめて論理的かつ集中した思考の連続を要求する。将来のあるべき理想の技術体系は何かと連続

して思考し、そのために必要な技術開発を遂行し続けるのが大学である。企業の研究者の日常とはきわめて異なっている。顧客に十分満足してもらえないものやサービスを毎日遅れることなく提供することにより利益を挙げ続けなければならぬ企業研究者は、短期的、応急手当て的思考を強いられる場面が圧倒的に多いため、ものごとの本質を考えて課題を克服しようとはしないし、通常でできない。結果として、思考は論理性を欠き散漫になる。海外に進んだ手本があつてもにもかくにも、追いつき追い越せの時代には、これでもこと足りる場合が多かつたが、将来必要となる技術体系の大きな枠組みをも含めて洞察し、かつそのために必要となる新技術は何であるかを読み切つて、効率の良い開発を展開するには、原理原則に基づく論理的、系統的かつ集中的な思考能力が不可欠である。大学人は技術のあるべき姿、理想の姿、極限、限界を理論的に思考することに優れている。当面の課題だけを克服するのであれば実に多数の可能性が存在するのであるが、その技術の極限・限界に至るまで通用する手法はおそらく一つしかない。将来必ず主流となるそうした技術を予見、洞察し、それに向かつて論理的かつ系統的に研究開発し実用化・事業化し続けることが産業競争力強化であり、科学技術立国である。若い人達を指導しながらそうした研究開発・実用化・事業化のできる指導者を育成するのに社会人博士学生の制度はきわめて有効に機能していると筆者は実感している。

将来の我が国を担う若手指導者の育成に当たる大学教授の責任は重い。

社会人ドクターを終えて

日本無線株式会社研究所 竹内 嘉彦

技術革新や産業構造の変革に伴い、知識・技術の急速な陳腐化、既成の価値観の崩壊が著しい現在、技術者にとっては、変化の方向性を見極め、変化の方向性に則して絶えず新たな知識を補充していくことが重要である。社会に出て特定の分野に神経を集中し、何度か大学教育を終えるだけの期間を会社の特定な業務に就いて来ると、一分野には明るくなるかもしれないが、視野が狭くなり、近頃のものしか見えなくなっているだろうか。技術者として、自分の資質は常に自分で責任をとらねばならない。充分社会に通用し、変化に対応できる知識を身に付ける努力は重要に思っている。幸い大学は、社会人に対して、現在開かれていて、今取り組んでいる仕事を別の角度から眺め、また新たな知識・技術を身につける機会がずっと身近になった。もともと産学協同の盛んな東北大学において、過去におい

社会人ドクターをふりかえって

佛富士通研究所 川上 進

て多くの成功例があるものの、現在は、博士課程後期においても、社会人特別選抜として、社会人を対象に特別枠が設けられている。私も、会社側の理解が得られ、仕事を継続しながら大学に通うことができた。幸い平成九年三月、無事、学位を頂くことができた。その間、指導教官である山之内和彦教授をはじめ多くの先生方に、貴重な意見、指摘を数多く頂くことができた。いずれも、その道を究めた人のみ持つ内容で、また別の視点からの示唆に富むものでもあった。ここに深く感謝するとともに、多くの方々が、それぞれにこの機会を利用されることを望みます。

渡邊寧先生ご誕生百年記念会開催

去る十一月十四日、故渡邊寧先生のご誕生百年記念会が学士会館で開催されました。先生は昭和三十五年まで四十年間教育、指導にあたり、水晶振動子、放電管、二重反結合、半導体等広分野で研究業績をあげ、通信研究所長、工学部長、続いて静岡

先生のご長男真様、ご次男剛様、知人の中島茂様、故伊藤隆二様、ご子息良昌、光昌両氏、岡野澄様、風戸健二様、門弟阿部善右衛門様のご出席をいただき、渡邊研究室卒業生と旧職員五十名の方々が参加しました。発起人代表善安善市氏（電十四）の挨拶で開会し、右知人、門弟の皆様と岡村進氏（電十一）、本多波雄氏（通十九）、西澤潤一氏（電二十三）、今村徳輔氏（通二十）の先生を偲んだ各スピーチの後、二十数年振りの「渡邊研究室同窓会」を兼ねました。続いて真様からご挨拶をいただきました。戦前自宅でしたためられた貴重な芳名録を披露されました。発起人緒方研二氏（電十六）の挨拶で定例会を閉じました。立派な人格者でいつも暖かい先生であつたというスピーチがありました。暖かく楽しいおもいで散会しました。

（小林春洋（電二十四）記）



車の中で考えてきた「運動視と両眼立体視を行う大脳神経網の仕組み」で、指導教官である阿部教授のお薦めで選びました。考え始めた契機は、コンピュータではとても難しいパターン認識などを七カ月の赤ん坊でも平気でやっており、その仕組み（アルゴリズム）が判れば工学に活用できるのでは、と思ったことです。予備および本審査で、阿部・山本・阿曾・矢野教授に深いご議論と貴重なご指摘を。楽しい雰囲気の中で頂いたのを懐かしく思い出します。社会人ドクターについての感想を、制度と集中講義の面から述べてみます。一年間で卒業できるコースに入學した訳ですが、二つ点で良い制度と思えました。第一は、これまでの論文博士制度では忙しさに加えてのびのびになりやすいのですが、入學してしまえばスケジュールに追われしかも短期のため、普段の仕事と両立させられるようです。また、一年間で卒業できそうかを入学試験で審査頂けることも、研究の完成度を自分なりに把握できて助かりました。第二は、専門誌掲載論文が四件以上必要な論文博士に比べて、二件程度と少なく、論文投稿の余裕を取りにくい社会人には嬉しい制度と思えます。

もう一つ非常に良かったのは、八人の先生方による四日間の集中講義（スピークスと応用物理学特論）です。二〇年前まで磁気ディスクを開発していたことから、磁気記録・磁性デバイス、磁性材料などの最新技術や動向を大変興味深く聴講しました。特に、これまでの磁性だけを利用する時代から、伝導電子との相互作用をも活用する新しい時代に入り、ジャイアントMRヘッドを手はじめに、大きな可能性を開きつつあることを強く感じました。正規の授業では半年をかけるそうですが、それを三時間に濃縮してしかも分かりやすくお話し頂いたため、全体像をよく把握できたように思いました。先生方の工夫とご努力に感謝を申し上げます。このような講義を一般社会人も聴講できるとよいのではと思いました。

米国などでは、大学と企業の間を自由に行き来できる「人的な流動性」が高く、それが国全体の技術を活性化している要因の一つと聞きます。科学技術立国をめざす我国でも、この社会人ドクター制度が発展して、そのような流動性につながっていくことを期待しています。

駅伝大会の近況

青葉山の電気情報系と電気通信研究所の合同で行われる恒例の駅伝大会が十一月十八日に開催されました。通研駅伝大会実行委員会と電気情報系駅伝実行委員会によって主催され、今回で三十一回を数える一大行事となつていきます。ほとんどころでの研究室から一チーム以上、多いところでは三チームが参加し、合計七十八チームが約一時間一時間半にわたって競い合い、熱気あふれる大会でした。

一位は一昨年、昨年に続けて伊藤（弘）研（通研）、以下、二位・櫛引研（青葉山）、三位・大野研（通研）、四位・根元研（青葉山）、五位・澤谷研（青葉山）、六位・曾根研（通研）、七位・樋口研（青葉山）、八位・室田研（通研）、九位・横尾研（通研）、十位・一ノ倉研（青葉山）と、青葉山、通研が拮抗しています。

最後に電気情報系の一〇一号室で表彰式がとり行われましたが、ラッキー賞、プービー賞、特別賞（普通コースを走った女性および四十歳以上の男性が対象）など多くの受賞者に盛大な拍手がおくられ、和気藹々とした雰囲気です。

（電気情報系親睦会委員長・内田龍男 記）



電気通信研究所附属超高密度・高速知能システム 実験施設新実験棟落成記念式が執り行われる

水野 皓 司

(通研附属超高密度・高速知能システム実験施設施設長)

電気通信研究所附属超高密度・高速知能システム実験施設の新実験棟が落成し、施設の新規導入設備が稼働を始めたのを機会に、平成九年五月九日(金)に通研施設新実験棟落成記念式典を国際ホテルにて開催しました。記念式典には、学内外の大学・企業関係者約二六〇人が出席して下さいました。式典では、沢田康次通研所長の式辞、施設長の施設概要紹介、阿部博之東北大学総長のご挨拶に続き、吉本亮三文部省大臣官房文教施設部仙台工務事務所長、難波進長崎総合科学大学教授、伊澤達夫日本電信電話株式会社取締役基礎技術総合研究所長から祝辞をいただき、その後ビデオによって落成した新実験棟と新規導入設備の紹介が行われました。

引き続き行われた記念講演では、日本電気株式会社顧問の植之原道之氏が、「ご自分の日米両国における研究を振り返りながら「極限への挑戦」と題する講演をされ、面発光レーザーの世界第一人者の東京工業大学精密工学研究所所長伊賀健一教授は、「光を集める、光で広げる」と題して面発光レーザーの研究開発から将来社会がそれによりどのように変わるかを講演されました。お二人のご講演は、通研施設の式典記念講演にふさわしく、高度の研究成果に基づく技術的発展が社会に及ぼす広い影響についての示唆に富んだものでありました。

最後に夕刻より祝賀会が執り行われ、廣田榮治総合研究大学院大学学長、鳳紘一郎東京大学大規模集積システム設計研究教育センター長、鈴木謙爾東北大学金属材料研究所長よりご祝辞をいただいた後、豊田淳一東北大学大学院工学研究科教授よりの乾杯の発声により、ご出席の皆様との和やかな歓談が行われました。

ここに改めて、記念講演、ご祝辞をいただきました諸先生、そして式典ならびに記念講

演会、祝賀会にご出席いただきました皆様にお礼を申し上げます。

電気通信研究所附属超高密度・高速知能システム実験施設は、情報通信分野の最先端技術である原子制御プロセス基盤技術、極微細波動基盤技術、大規模集積化基盤技術の先導的創成によって超高密度・高速知能システムの基盤技術を確立することを目的に、平成六年六月二四日に設置されました。施設は、今回の新実験棟の完成によりシリコン集積回路用クリーンルームと設備がさらに充実し、また化合物半導体用クリーンルームも加わって、電気通信分野における全国唯一の共同利用研究所の附属施設としてますます充実致しました。今後、本施設を利用した電気通信研究所、東北大学大学院工学研究科・情報科学研究科の研究室から、革新的な先導的成果が生まれていくものと期待されます。今後とも同窓会の皆様のご指導、ご鞭撻をどうぞよろしくお願い申し上げます。

創造工学研修—一年次学生教育の新しい試み

宮城 光 信

(電気・通信工学専攻)

平成六年度より教養部が廃止され、工学部に於いては平成八年度から、入学者の選抜方式が「一括募集」から「系別募集」に移行することになった。この様な背景にあって、平成六年四月、工学部教務委員会の中に、工学教育への提言・発信を行うべく、「工学部将来構想検討WG」が結成された。WGでは、キャッチアップ型の教育から、創造型の教育への質的変換を図るための教育システムの構築に向け、若手教授による真剣な討論が長期間行われた。工学における創造性の重要性の理解・育成を目的に開設されたのが「創造工学」と、二セメスターに配置された「創造工学研修」(一単位)である。「創造工学研修」では、「創造」、「解明」、「発見」する喜びを育てる点に重きを置いた。研修テーマの設定は最終的には教官が行うことになった。学科・系を横断でき、小人数(三人程度)編成用のテーマであること、コミュニケーションとチームワークを重んじる

工学部オープンキャンパス

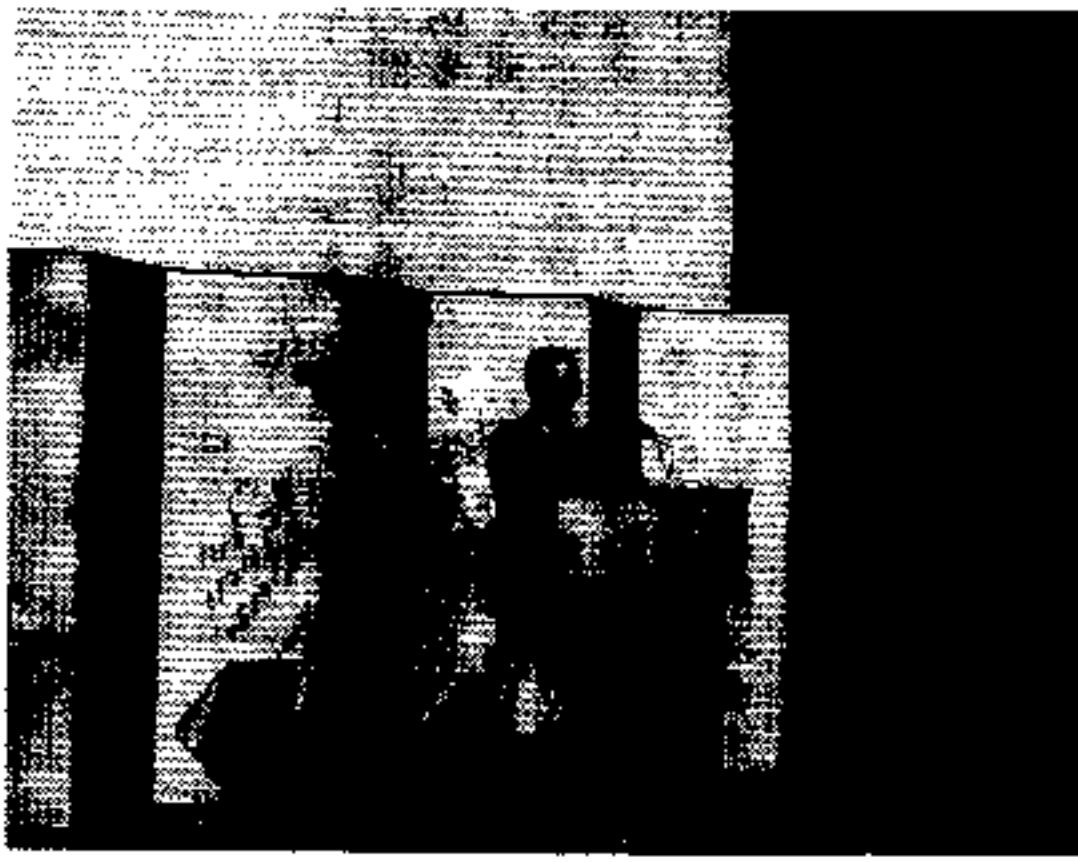
工学部では平成八年度から全学科が一斉に学科公開するオープンキャンパスを開催しております。この事業は、工学部の研究を理解してもらおうと共に、真に興味を持てる分野に出会う機会を中高生に提供することを目的としており、本年度は「フューチャーテクノロジ— 未来を創造する」のテーマで平成九年七月三十一日、八月一日の両日に行われました。また、初日には新たな試みとして、東北通産局と共催で産学交流セミナーを同時開催し、企業にも広く参加を呼び掛けました。さらに、各系には高校生のための「進路相談コーナー」と企業のための「研究・技術相談コーナー」を設けるなど、昨年度よりも充実した企画を実施し、工学部全体で高校生約千八百名、企業関係者約二百六十名の参加者が得られました。特に二日目は理学部の学科公開が行われたこともあって、主に東北各県の高校から二十台を越える貸切バスが工学部に到着

こと、着想力、構想力を育てることが出来ることなどを教官に御願いました。平成八年度の創造工学研修では、教官より六十四(受入可能人数四百六十名)のテーマが提案され、実行テーマ数は四十、受講者数は二百名にも達した。テーマ例を示すと、「ロボットコンテスト」、「科学館のための物理実験器具や展示品の製作」、「半導体表面に原子を並べる」、「オリジナルプラスチックを合成しよう」、「電池のエネルギを絞り出せ」、「生物指標を利用した環境水の汚濁評価」など、創造性を育てようとする教官側の多様な姿勢が感じられる。卒業要件には入っていない科目であるが、このように多くの学生が受講している事は、意欲あふれる学生が東北大学工学部に多数在学していることを示している。「創造工学研修」は学生側にも教官側にもポジティブに受けとめられており、平成九年度も行われている。

し、一時は道路がバスで埋まる程でした。昨年度は改修工事のため、応用物理学科の教室を借りたパネル展示にとどめた電気・情報系四学科では、「二十一世紀を拓く情報工レポートニクス」と題した電子・応用・情報系の研究紹介パンフレットを作製し、全研究室を公開しました。また、最新技術の体験コーナーは好評を博し、昨年度の六百五十名に対して、本年度は高校生約七百五十名、企業関係者約百五十名を含む約千名が電気・情報系を訪れました。

このように、オープンキャンパス事業は二年目を迎えて企画も充実し、参加者も増加して着実に定着してきております。三年目に当たる平成十年度は七月三十、三十一日に開催することがすでに決まっております。同窓会会員の皆様にも多数ご参加頂き、ご批判などを頂戴できれば幸いです。

(澤谷邦男 記)



東北電力寄附講座、 電気・情報系に開設

既設のJ.R.東日本寄附講座に続き、先端電力工学(東北電力)寄附講座が平成九年四月に新設されました。電気・通信工学専攻二つの寄附講座であり、東北大学としては、既に終了した金研のもの一つを含めると三番目の寄附講座であります。

本寄附講座の目的は、パワーエレクトロニクスや超電導などの先端技術の知見を幅広く取り入れながら、電力・エネルギー関連分野の研究・教育を総合的に推進することです。人材養成はもちろんのこと、大学と電力産業との情報交換、人事交流の活性化、シンポジウムや研究会の開催による学会活動への貢献、公開講演会や公開討論会の開催による社会への貢献等が期待されます。

設置の経緯としては、平成八年度当初から電気・情報系の中鉢教授と佐藤教授が東北電力の佐藤副社長および松田副社長と折衝され、夏頃おおよその合意が得られました。九月からは電気系教授数名と東北電力からの代表者三氏とでワーキンググループを結成し集中的に検討が進められました。講座名を決定、設置趣意書を作成、寄附講座設置を申請し、十月初旬に工学部教授会で承認されました。ただちに寄附講座教官候補者の検討に入り、十一月初旬までに客員教授と助手の候補者を確定し、十二月中旬に工学部教授会で教官任用が承認されました。

本寄附講座の構成としては、平成九年四月からは客員教授と助手の二名でスタートしましたが、十月から非常勤講師一名が加わり三名です。客員教授としては原子力研究所那珂研究所の前所長の島本進氏です。氏は昭和三十六年に本学電気工学科を卒業され、主に、核融合炉の超電導磁石および冷凍系の開発研究に従事され、数々の世界的な業績をあげられました。着任直後の四月には科学技術功労者として科学技術庁長官賞を受賞されました。助手としては本学大学院後期課程を修了した金子俊郎氏が同時に着任されました。また、十月からは東北電力の研究開発センターの白崎隆氏が非常勤講師として着任されました。こ

れら多彩な分野出身の教官により人材養成と共に、電力機器への超電導の応用による新しい技術の展開および大電力送電系統等に関する将来展望が得られることが期待されます。東北電力寄附講座開設にあたり、多くの方々のご協力を頂きました。この紙面をお借りし関係各位に厚くお礼申し上げますと共に、今後ともご支援ご鞭撻のほどをお願い申し上げます。(犬竹正明 記)

平成九年度同窓会総会報告

平成九年度の同窓会総会は、東京支部総会との合同で、平成九年九月十二日午後四時から六時三十分まで、例年同様東京神田の学生会本館二〇二号室において開催された。

竹内興二(松下通信工業)東京支部幹事が開会を宣言し、初めに佐藤利三郎同窓会長、続いて原島進(松下通信工業)東京支部長が挨拶を行った。佐藤会長は、その挨拶において、同窓会の現況概略を紹介すると共に、東北大学の発展に同窓生の支援・激励が不可欠であることを力説した。また、原島支部長は、厳しい局面に一社で対応することは困難で、相互の協力が必要であり、同窓会等による人間関係の活性化が重要であることを指摘した。引き続き、大学の近況について、阿部健一電気・通信工学専攻及び澤田康次電気通信研究所長から、情報科学研究科の創設、工学研究科の重点化、及び電気通信研究所の再編が成った現時点における一体運営体制、大学院の特色と問題点、就職・進学状況、共同利用研究所としての電気通信研究所における研究の新しい推進方策と産学共同の取り組み方等について紹介があった。

次いで議事には、平成八年度の事業並びに会計報告、平成九年度の事業並びに予算案が承認され、平成十年度の役員が選出された。会長、副会長に、それぞれ佐藤(昭三十九)現会長、城戸健一(昭二十三)現副会長が再選され、総務幹事に佐藤徳芳(昭三五)教授、庶務幹事に米山務(昭三四)教授、会計幹事に中村信良(昭四一)教授、会報幹事に山之内和彦(昭三四)教授が、それぞれ選出された。

次いで、東京支部総会に移り、平成八年度の事業並びに会計報告、平成九年度の事業並びに予算案が承認された。また、平成十年度の支部役員として、支部長に吉田章(昭三七、三洋電機)氏、副支部長に内田善之(昭三七、富士電機)氏、幹事に小林明夫(昭四四、三洋電機)氏、副幹事に大沼崇(昭四八、シーメンスコンポネンツ)氏を選出した。

引き続き、例年どうり特別講演が行われた。講師は松下通信工業女子陸上部監督の横溝三郎氏で、演題は「私とスポーツ」であった。氏は当時箱根駅伝で連覇を続けていた中央大学チームの一員として活躍し、また東京オリンピック三千メートル競技の選手でもあった。その後、女子駅伝監督及び駅伝実況放送解説者として活躍してきている。選手としての経験と監督としての見解など、示唆に富む講演内容であった。

総会終了後、学生会館二〇二号室において盛大な懇親会が催された。参加者は百数十人で、世の不況風を反映してか、昨年より少なかった。小林東京支部副幹事の司会で進行し、物故者への黙祷の後、吉田東京副支部長が開会挨拶を行い、「出合い」を大切にしたいとして、同窓会活動の重要性を強調した。緩急紹介の後、佐藤同窓会長の挨拶があった。西澤前東北大学総長の業績を讃え、共に、今後の活躍を期待する、とする趣旨の内容であった。引き続き、西澤前総長は、東北大学におけるかつての「先見の明」に感謝すると共に、その繁栄を取り戻すために、外部から手伝っていきたい、と挨拶した。一方、宮地杭一(昭十四)元芝浦工業大学学長は、学長を終ると同時に、電子工学に別れを告げ、現在は「音楽舞踊新聞」に舞踊の批評を書く生活をしている、と悠々自適の心境を披露する挨拶を行った。城戸副会長の乾杯の後、懇談に移った。過ぎ去った昔、多くの話題を抱える今、いろいろな話題に談話の花が咲いて、和やかで爽やかなひとときを過ごした。

平成十年度総会・懇親会が更に盛大になるよう、会員諸兄の協力を願う次第である。最後に、本会開催に対する東京支部役員の皆様への御尽力に感謝する。(佐藤徳芳 記)

「エレクトロニクス発展の あゆみ調査会」報告XI

事務局長 斎藤 雄一

当会の事業に関する十一回目の報告です。昨年の報告で、出版計画については近く大詰めを迎える予定、と申し上げましたが、最終的な内容の調整、図面の制作、写真の収集等に約一年を費やす結果となり、九七年末の時点で、ようやく最終稿が完成しました。このような次第で、当調査会の第一目標であった出版計画は、同窓生の方々のご協力を得て、このたび達成できることになりました。

調査会として、次に行う事業は、当面この出版に関連して各方面から収集された貴重な資料を、できるだけ多くの方々に利用していただくべく整理した上で利用しやすい方法を計画することだと考えております。調査会は現在まで、東北大学工学部創立(一九一九―大正八年)の頃から昭和十年あたりまでを中心として、エレクトロニクス発展のあゆみをたどることを主なテーマとして、記録をまとめて参りました。しかし、収集した資料の範囲はさらに広く、第二次世界大戦後、エレクトロニクス技術の復興とその後の急速な発展に様々な形で貢献された方々の記録、文献等も収集されています。

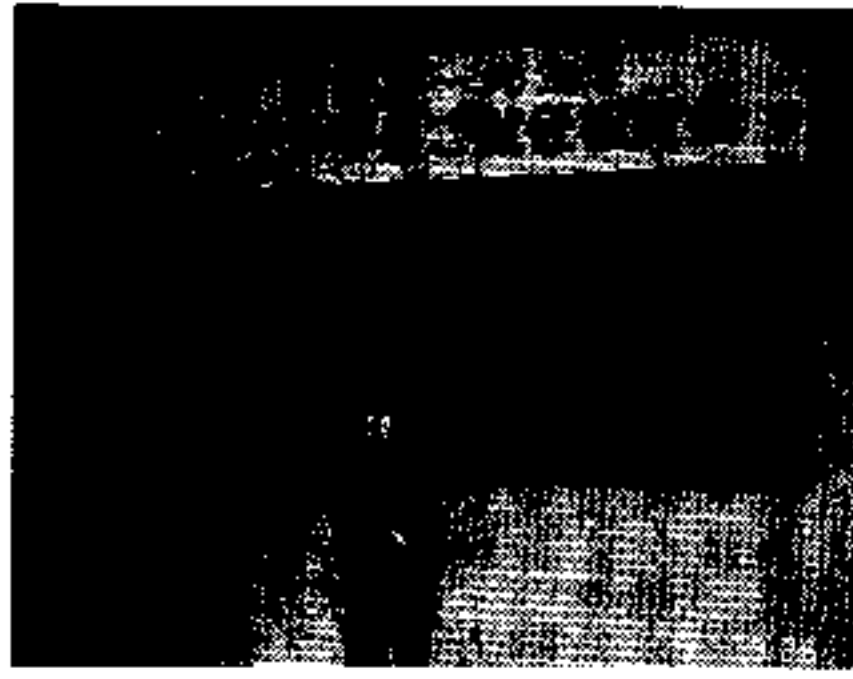
ここ数年の報告で申し上げておりますように、最近、明治以来の科学技術発展の歴史に関する研究が各方面で盛んになってきております。例えば、電気学会ですが、電気工学教育の歴史および電気技術国産化の歴史研究専門委員会が終了しましたが、その後、歴史的な文献・資料等の維持管理に関する委員会が活動を続けています。今回の出版も、これら歴史研究の一端を担うものであると考えておりますが、収集された資料がさらに次の段階の研究活動に貢献できることを願っております。

調査会連絡場所
〒104 東京都中央区銀座七一九一〇
銀七ビル(株)グロリアビルE15内

電話(〇三)三五七二―四八三一
FAX(〇三)三五七二―四八三二
E-mail yuchis@blue.ocn.ne.jp

野口正一先生の 会津大学学長就任をお祝いして

野口正一名誉教授は、平成五年三月に停年退官された後、日本大学工学部に勤務すると共に、情報処理学会会長として内外で幅広い活動をされてきました。この度、福島県立会津大学の第二学長に選出され、平成九年四月一日に就任しております。会津大学は平成五年四月に開学した日本初のコンピュータサイエンスを専門とする大学です。今年四月には大学院修士課程がスタートし、平成十一年四月の博士課程設置に向け準備が進められています。学生数は、学部生一、〇一二名、大学院生五八名の計一、〇七〇名、又教員一〇〇(平成九年七月現在。)となつています。学内の高速ネットワークはインターネットへ接続されており、また、学内で年六回程度実施している国際ワークショップ等では世界の研究者が会津大学に集い、グローバルな研究活動が進展しています。平成一〇年の四月には、岩手県立大学(学長・西澤潤一先生)、さらに平成十一年には秋田県立大学が開学する予定であり、会津大学は東北における県立

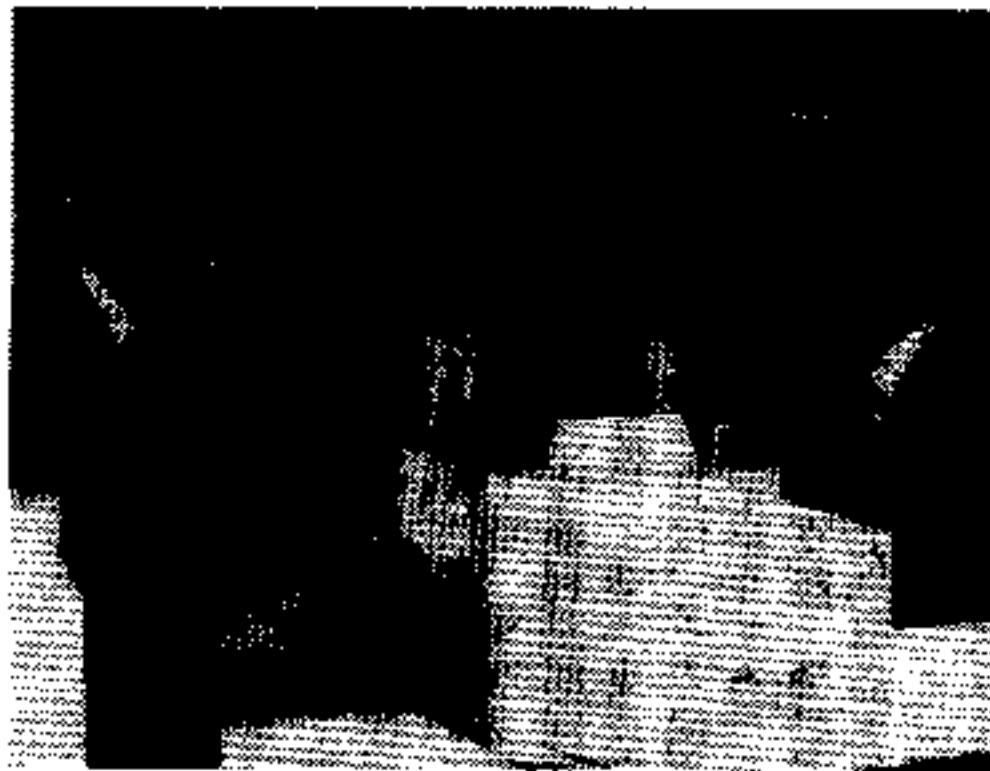


(白鳥則郎記)

渡辺英夫先生の仙台電波高等工業 専門学校校長就任をお祝いして

渡辺英夫先生が本年四月一日より仙台電波高等の校長に就任されました。平成九年五月十九日(月)に電気・情報系と通研及び仙台

周辺におられる方々によって激励祝賀会が行われ、青葉山からは十一名、通研より十三名、その他各高専などから七名程 参加されました。最初に司会の私から祝賀会までの経過の簡単な説明と高専校長会の社会的ステータスの高さの紹介の後、情報科学研究科長の樋口龍雄教授より同級生としてのはげましの言葉が贈られ、その後通研所長の澤田康次教授から通研の現状をまじえたなごやかな祝辞がのべられました。又、東北学院大に移られた中鉢憲賢教授より先輩としてのはげましの言葉があり、電気・情報系の阿部健一教授からは豊橋技科大の経験をもとに高専教育の重要性のうったえがあった後、宮城高専の白瀬丘教授などから高専教育の現場の苦勞をユーモアをまじえてうったえる祝辞がありました。最後に渡辺校長より今後共、電気・情報系、通研及び高専の各関係者の一層の御支援のお願いがのべられて、電気・情報系の佐藤徳芳教授の一本しめで、祝賀会はなごやかに終了しました。(山下努 記)



小杉文部大臣来校のとき、教育研究の説明をする渡辺校長

1996 IEEE クレド・ブルネットイ賞を受賞して

小 柳 光 正
(機械知能工学専攻)

三次元スタックドキャパシタDRAMセルの発明で、IEEE (米国電気電子学会)

より一九九六年のクレド・ブルネットイ賞(Credo Bruneth Award)を授与されました。クレド・ブルネットイ賞はIEEEによって一九七五年に設立された賞で、集積回路の発明で有名なジャック・キルビーが受賞者の一人であることからわかるように、エレクトロニクス素子やシステムの小型化に貢献をした研究者に与えられる賞です。電気・通信・情報同窓会の大先輩である岩崎俊一先生が一九八九年に日本人として初めて受賞しております。今回の受賞の対象となった発明そのものは私が勤務していた日立製作所・中央研究所時代に行つたものです。発明の基となったのは恩師であります前東北大学総長の西澤潤一先生から御指導頂いた研究に対する実践的な考え方であります。現在、この発明はマイクロプロセッサと並んで今日の高集積・大容量集積回路の双壁と言われているDRAM(ダイナミック・ランダムアクセス・メモリ)の基本素子として広く採用されています。このような発明をすることができたのも西澤先生を初めとしまして、東北大学の伝統を築いてこられた電気・通信・電子・情報同窓会の諸先輩方のお陰と感謝しております。紙面を借りて深く御礼申し上げます。

現在、私は機械知能工学専攻(知能システム設計学分野)の教授として半導体集積回路や並列コンピュータ、脳型コンピュータの研究に従事しておりますが、今後はこの分野で微力ながらも東北大学のために尽力して行く所存であります。皆様方のなお一層の御指導と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

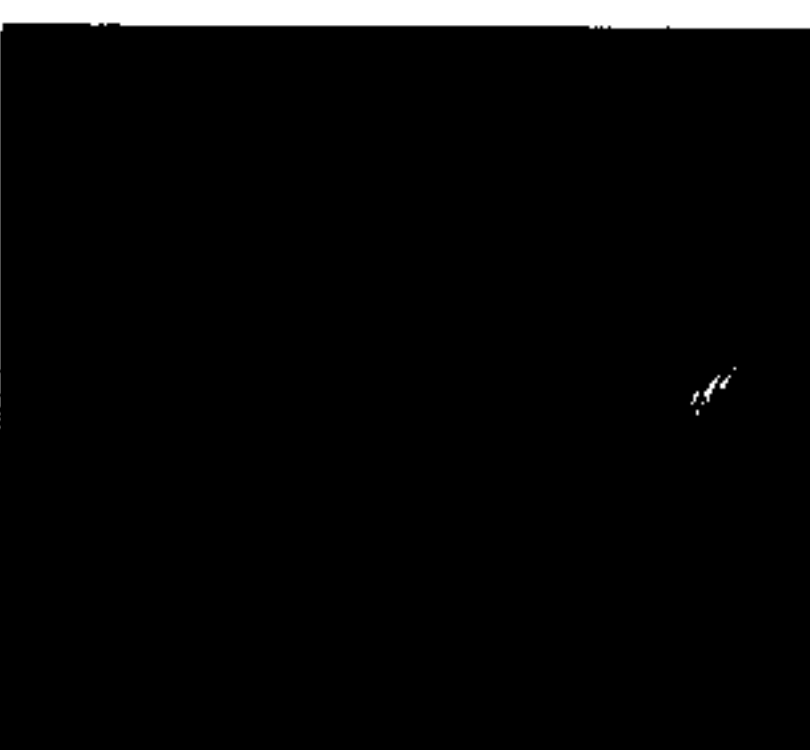
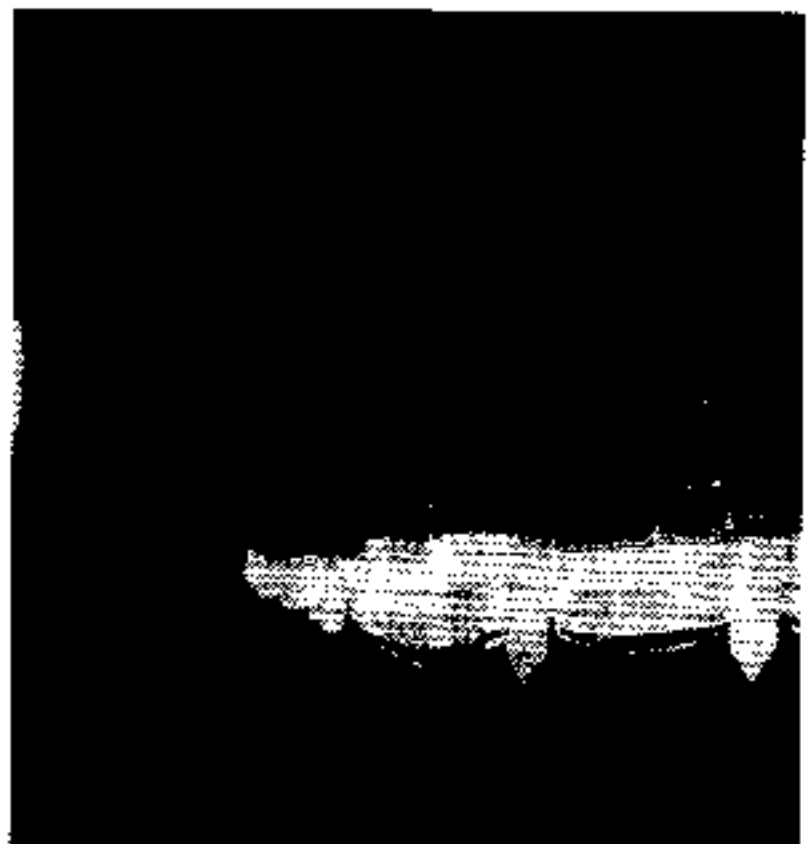
1997 IEEE M.N.リープマン記念賞を受賞して

外 岡 富士雄
(電気通信研究所)

東北大学前総長及び私の恩師であります西澤潤一先生ならびに東北大学電気・通信・情報同窓会の先輩であります永井淳前東芝監査役のご推薦を頂き、今回米国IEEEよりM.N.リープマン記念賞を頂きました。これは東北大学における学部、修士及び博士課程と一貫してご指導を頂きました西澤潤一先生のご指導のおかげと心から感謝申し上げます。

M.N.リープマン記念賞は、IEEE (米国電気電子学会)の前身であるIREE (米国ラジオ技術学会)の時代の一九一九年に創設され、電気電子技術の分野で最近もつとも貢献した技術に於ける賞であります。今回受賞した対象技術としては、フラッシュメモリの開発であります。現在までのシリコン集積回路の発展は、インテル社開発のマイクロコンピュータ用のCPU、DRAM、SRAM、紫外線消去型のEPROM及び製造時にデータを書き込むMROMと全てインテル社が命名した集積回路によつてあります。今回受賞の対象となったフラッシュメモリはインテル社以外が命名した初めて世界に一般名詞として使われるようになった半導体集積回路です。このように新しい分野を開くことが出来たのは、恩師であります西澤潤一先生の日頃の薫陶のおかげと感謝しております。

この賞を励みとして我が同窓会の後輩が研究・開発に精進されることを期待いたします。



近況報告

東北学院大学工学部 官本 信雄



平成八年三月に電気通信研究所を定年退官して早二年になるうとしています。東北学院大学工学部にお世話になって、東北

大学とは違った環境で教育研究に携わり、誰しもが感じていることですが、教育研究環境のあまりの違いに今更ながら驚いているところ。このような環境だからこそ、教育に対する情熱と研究におけるアイデアの有無が問われ、何かをしななければならないと感じているのですが、自らの力のなさに恥じているところ。今年の四月より電気工学科の学科長を依頼され、私立大学の運営にも若干関わっているのですが、分からないことばかりで戸惑っております。とくに東北大学の時代には、教務関係の仕事はすべて青葉山の先生方が引き受けて下さっており、私が引き受けて下さったので、学科長になってからの教務の仕事は何もかも始めてのことばかりで、今になって電気・情報系の先生方には大変感謝しているところで

ところで、ご承知のように、若年層の少人数化に伴い、私立大学も競争の時代に入り、東北学院大学でも、魅力ある工学部への改革が求められています。しかし、何を始めるにしても我々の大学は、健全財政が第一で、全く経費のかからない組織改革、教育環境の整備が望まれています。そんな時、県立の宮城大学、岩手大学、秋田大学などの税金でバックアップされた大学が発足するので、外圧が増すばかりです。しかも、決まったよ

うに、改革の常道として、定員の見直し、カリキュラムの再編、組織の見直し、どれをとっても難題ばかりで動きが取れません。このような改革が本当に必要なのであるか。やはり教育をする人の中身が変わらなければ、何を

研究室だより

豊田研究室は昭和五十八年四月に電力システム工学を専門分野とする研究室としてスタートしました。創設当初は豊田教授をはじめとするとするスタッフ三名、秘書、学部四年生三名の小規模な研究室

でしたが、現在では大学院生八名、学部四年生七名、研究生一名と電気・情報系の平均的研究室の規模になっています。また、これまで、イランや中国からの留学生・客員研究員、電力会社からの受託研究員、社会人大学院生を受け入れ、海外・産業界との接点も重視して研究を進めてきています。卒業生の多くは電力会社をはじめとする産業界で、研究室で学んだ知識をベースに活躍しつつあります。電力システムに関する研究の中でも、大規模システムの制御、運用、計画の分野では常に新しい技術の開発や導入が要求されています。豊田研究室では、創設以来、電気エネルギーの有効利用、インテリジェント化技術や自律分散概念の応用などについて重点領域研究・総合研究の場を通して基礎研究を進め、同時に東北電力や製造会社の委託を受けて新技術の応用開発研究を行っています。

工学研究科 電気・通信工学専攻

豊田研究室

やっても無駄ではないのかと考えると、これまで努力された先輩の苦勞が偲ばれます。今、教育の世界では、心の教育が重要視され、そんな中でキリスト教の信仰を通して精

研究課題には電力ゆらぎを利用したシステムの安定性監視があります。電力システムは数万台の発電機が複雑な送電網を介してほぼ同期して運転されている大規模な動的非線形システムですが、正常状態においても送電線の有効電力の流れに微小なゆらぎが重畳しています。人間が体調を脈拍を計って調べるように、微小なゆらぎから電力システム全体の「体調」を診断できないだろうかという研究を進めております。最近GPSにより同期計測された多地点の実測データを利用して、より広域的な電力ゆらぎ監視システムの実現に向けて努力しています。他の主要研究テーマとしては、超電導磁気エネルギー貯蔵装置をシステム安定化に役立てる方法や都市環境に適した電力供給システム、ニューラルネットワークや遺伝的アルゴリズムに代表されるA・ライフ技術の電力システムへの応用など多岐にわたっています。また、近年、世界の電力産業が直面している競争環境の中で、競争と協調という枠組みから電力システムの制御、運用、計画の問題を捉えなおそうとしています。例えば、生物学的視点に立った電力システムの成長モデルや送電ネットワークのオープンアクセス

神教育を重要視している東北学院大学は、これこそ本学の建学の精神であると絶えず言い続け、学生に必須教育を行っています。この教育目的も形式にとらわれているようであるが、だ理解しがたいと思うこの頃です。



化を念頭に置いた電力流通制御などについて、新たな研究テーマを創設し、意欲的に挑戦しています。このように豊田研究室では、電力回路・電気機械的システムとしての側面、社会のインフラ構造としての側面、情報処理技術の応用領域としての側面から電力システムに関する諸問題を取り上げ、将来あるべき電力システムの姿を模索しています。

中鉢憲賢先生御退官

永年東北大学工学部および電気通信研究所において研究と教育にご尽力された中鉢憲賢先生が、平成九年三月三十一日をもって東北大学を停年退官されました。

先生は仙台のご出身で、昭和三十一年三月に本学工学部電気工学科を卒業になり、一度社会に出られました。昭和三十五年四月には本学大学院工学研究科電気及通信工学専攻修士課程に入學され、昭和四十年三月に博士課程を修了されました。同年四月より本学電気通信研究所助手に任用され、昭和四十一年三月に同助教授、昭和五十四年一月に本学工学部教授に昇任され、電気工学科電気計測学講座を担当されました。その後、平成五年四月より新設された生体電磁工学講座を担当され、工学部の改組に伴い平成六年四月からは同大学院工学研究科電気・通信工学専攻電磁工学講座生体電磁工学分野を担当されました。また、平成六年四月から二年間、本学附属図書館工学分館長を兼任されました。

先生は、東北大学在任中は、一貫して超音波工学の研究をなされ、工学部に移られた頃は、「超音波顕微鏡の開発」に熱中されておられました。また、計測工学の新しい分野の開拓にも努力され、超音波の医学的応用、地熱開発に伴うアコースティック・エミッシヨン(AE)法を用いた地下情報計測、音響計測などの研究、さらに、これらの計測にディジタル信号処理の手法を取り入れた研究を広く行なわれました。これらの研究のため、材料工学、生物学、医学などの研究分野との学際的共同研究を国内外において積極的に進められ、多大の研究業績を挙げられ、数多くの新しい研究の種を蒔かれました。

超音波顕微鏡とその応用に関する研究成果は、特筆すべきものであり、世界的に高く評価されており、超音波顕微鏡技術に加えて、さらに超高速波帯パルス超音波マイクロスコピー技術を開発し、「超音波マイクロスケクトロスコピー(UMS)技術」という

研究室だよりの

昭和五四年八月、山之内が通研の固体振動回路工学部門を担当し、研究室では、通信・信号処理デバイスへの応用を念頭に、弾性波・弾性表面波(SAW)の研究を行って来ました。

SAWデバイスは、小型でかつ高性能であるため、主にバンドパスフィルタとして広く利用されるようになりました。山之内研究室で得られた多くの研究成果もSAWデバイスの実用化に貢献してきました。そして現在は、すべてのテレビの中間周波数帯(日本では57MHz)のフィルタにSAWフィルタが用いられるようになり、また、PHS、携帯電話をはじめとする移動体通信機器にも、五、六個のフィルタ及び共振器が用いられるようになりました。

電気通信研究所 山之内研究室

いま移動体通信の周波数帯は1GHzから2GHzへ拡大し、今後はさらに5GHz帯へ高周波化されると共に、画像の送受信、ウォッチサイズ化のため、より小型軽量、高性能、広帯域のデバイスが要求されています。SAWデバイスはまさにこれらの要求に応えるものであるといえます。また、超小型で高速・高密度の信号処理ができるため、スペクトル拡散通信分野でのキーデバイスとしても注目されています。

これら次世代への要請に応えるため、山之内研究室では圧電・誘電材料からSAWデバイスの研究を行っています。電気信号を弾性波に変換する能力、即ち電気機械結合係数が究極の値である一〇〇%に近く高

効率の圧電単結晶及び薄膜材料を目指して研究を進め、これまでになく非常に大きな電気機械結合係数(K₃₃)をもつPZT₅単結晶基板を見出し、レイリッド波プランチで従来最も大きな単結晶として知られていたPZT₅基板の約十倍の値(K₃₃)をもつことを理論解析と実験により明らかにしました。本基板は常温付近で零温度係数をもつ優れた特性を有することも分かり実用化が期待されます。現在この単結晶を引き上げ育成炉を用いて育成するとともに、MOCVD法による薄膜化の研究を行っています。また、移動体通信では、200MHzと2.5GHzの周波数帯で低損失フィルタが要求されていますが、すだれ状電極(IDT)の励振と反射の位相差を利用した一方向性変換器を用いることでこれを実現しております。そして、将来のターゲットとして、数十GHz帯の弾性波デバイスを実現するために、電子線直接露光による微細加工技術の研究を行っています。現在、線幅とギャップの間隔が一対一で周期構造の電極の作製を試み、0.06ミクロンの電極作製とそれに対応した十五GHz帯のSAWの送受実験に成功しています。

将来の通信方式として注目されているCDMA(符号化多元接続通信方式)の復調器として、KNO₃単結晶を用いたコンポルバ、及び高結合SAW基板上にMBE法で作製したGaAs半導体膜中のキャリアとSAWの伝搬に伴って生ずる電界との相互作用を用いた新たな構造のコンポルバを開発し、従来になく高効率コンポルバ特性を得ており、今後の研究が期待されています。また、長助教授を中心

新しい測定概念にまとめられました。また、先生は、そのUMS技術を材料科学の分野において普及させるために、昭和六十二年には「UMS研究会」を発足させ、平成六年には「UMS研究会」を設立し、平成六年には「UMS実習室」を開設し、共同研究の場所と設備を提供されました。これら超音波顕微鏡の研究に関連して、平成二年には電気学会の電気学術振興賞(進歩賞)および米国IEEEよりUFFC論文誌最優秀論文賞を、また、平成七年には科学技術庁長官賞(功労者賞)、平成九年にはIEEEよ

りUFFC業績賞、などを受賞されました。学会活動としては、日本音響学会、電子情報通信学会、電気学会、日本超音波医学会、応用物理学会、米国IEEE等の要職を歴任されました。先生は、超音波工学という科学技術を通して国際交流や国際学会の開催を熱心に推進され、数々の国際会議の組織委員長として活躍され、国内外における超音波工学の発展に大きく貢献してこられました。先生は大学における工学教育に情熱を燃やされましたのはもちろんであり、最近で

に、圧電単結晶・薄膜や強誘電体の分極分布や、誘電率温度特性の評価を行う非線形誘電率顕微鏡及び光熱誘電率顕微鏡、更には、新たな動作機構の高密度誘電体記録の研究も進めています。以上のように、情報通信システムの高度化が進展している中で、来るべき二十一世紀のグローバルな高度情報化社会に向けて、長助教授、目黒助手、小田川助手、我妻技官と約十二名の学生、研究生と共に弾性波を利用した各種デバイスとそれらの高性能化の鍵となる材料及び評価の研究に励んでいます。

また、研究室では毎年夏旅行を行っています。また、旅行先の近くの国立・企業の研究施設を訪問、例えば水沢の緯度観測所、浅虫の水産研究所、一昨年は岐阜県神岡のニエトリノ観測所を見学し、親睦と少しは学術研究に役立つ研修旅行を計画しています。



ニュートリノ研究施設旅行の時の写真

は、青少年のための工学教育にも目を向けられ、平成六年から中学生を対象とした「楽しいサイエンス・サマースクール」を毎年開催されておられます。今後も、続けて行くとのことであり、先生の教育・研究に対するお考えであります。

先生はご退官後は、東北学院大学工学部教授に就任され、引き続き研究と教育に専念されておられます。先生のますますのご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。

(櫛引淳一記)

新しい超音波計測

東北大学電気通信研究所は磁気記録の開拓者である永井健三所長の定年退官を記念して、昭和三十九年二月に研究所主催のシンポジウムを開催した。一年後の昭和四十年二月に菊池喜充所長が当時のトピックであった「超音波電子音響学」を主題にシンポジウムを開催した。このような研究所主催のシンポジウムは当時の我国では珍しいことで、大変好評を博した。それ以来、このシンポジウムは「通研シンポジウム」として毎年開催され、今ではCOEとしての電気通信研究所の定例行事となり、今回は第三十六回にあたる。

本シンポジウム企画委員会では、第三十六回東北大学電気通信研究所シンポジウムの主題として「超音波」に関する研究を取り上げた。超音波の応用は極めて多岐にわたる、これまでも、前述の「超音波電子音響学」をはじめ、第六回には国際会議として「Acoustoelectronics」、第九回には「弾性表面波工学」を、そして第二十五回には「超音波エレクトロニクス」新しい圧電応用」を取り上げていた。そこで、本シンポジウムでは観点を計測の面におき、表題を「新しい超音波計測」とし、実行委員長に中鉢憲賢教授がなり、一九九七年二月三日・四日の二日間、東北大学工学部青葉記念会館において開催した。

新しい研究分野の開発・発展は計測技術と深い関係がある。本シンポジウムでは、(一)超音波トランスジューサとセンサ、(二)材料評価、(三)医用超音波計測、の三領域を選び、合計二十二件の講演を依頼し、百九十五ページの論文集を発行し、全国の大学・企業・研究機関から百八十二名の参加者があった。

まず、(一)の「超音波トランスジューサとセンサ」は、計測の基礎技術である。新しい計測技術を開発させ、支えるのもセンサである。計測用の超音波トランスジューサの最近の研究について、あるいは新しいセンサへの超音波の応用などを取り上げ、七件の講演が行なわれた。次に(二)の「材料評価」は、超音波計測の重要な分野で、新材料開発には不

可欠の技術である。最近の研究動向に関して八件講演して戴いた。最後の(三)の医用超音波計測は、前述の菊池喜充教授らが昭和二十七年頃より研究開発を始めている。現在では臨床で盛んに使用されて、完成された技術のように見えるが、学術的には新しい局面を迎えている。このセッションではそのブレイクスルーとして期待されている新しい研究を七件紹介して頂いた。高齢化社会を迎えて予防医学の分野にも超音波医学の貢献が期待される。通研シンポジウムはこれまでも新しい局面の展開に重要な役割を果たしてきた。ここに取上げた超音波の三つの分野にも、それぞれ永い歴史的な背景がある。古きを尋ねて新しきを知るといふ諺があるが、二十世紀の締めくくりにあつたというのではなく、二十一世紀の夜明けを告げる行事として本シンポジウムが少なからず貢献したと言える。

(金井 浩 記)

電気・情報系の近況

会員の皆様には、ますますご健勝で活躍のことと存じます。電気・情報系学科の最近の状況をご紹介させていただきます。

昨年三月に中鉢憲賢教授が定年によりご退官され、直ちに名誉教授の称号を授与されました。先生は超音波工学の分野で輝かしい業績を挙げられ、本系の発展に多大な貢献をされました。ご退官後も東北学院大学教授として引き続き教育研究に専念されておられます。先生の長年にわたるご尽力に深く感謝申し上げますとともに、益々のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

大学の運営については、本年度も樋口龍雄教授が情報科学研究科長として尽力されておられます。また、昨年度に引き続き、星宮望教授が評議員として大学および工学研究科の運営に活躍しておられます。

昨年四月に、JRR東日本寄附講座に続く、本系における二つ目の寄附講座として、東北電力株式会社のご寄附による先端電力工学寄附講座が開設になりました。それぞれの設立趣旨に沿い、十分に意義のあるものとなるよう、一同で両寄附講座の運営を進めて行く所存です。

つぎに、この一年間の主な人事異動をご紹介します。まず、昨年四月に、佐藤徳芳教授が電子工学科から電気工学科へ、川又政征教授が通信工学科から電子工学科へ移られました。また、電子工学科では、柴田直助教授が五月に東京大学へ、森田瑞穂教授が六月に大阪大学へ転出され、それぞれ教授に昇任されました。お二人には長年にわたり本系の研究・教育にご尽力頂きました。心から感謝申し上げますとともに、今後の益々のご活躍をお祈り致します。なお、柴田教授には引き続き併任として学生・院生の指導をお願いしております。また、四月に小谷光司助手が助教授に昇任されましたが、わずか二ヵ月後に東京大学大規模集積システム教育研究センター助教授として転任されました。ただし、この転任人事は一時的なもので、いずれ本学に戻ることになっておりますため、それまでの間、小谷助教授にも併任をお願いしております。ところで、新設の先端電力工学(東北電力)寄附講座には、日本原子力研究所から島本進客員教授をお迎えしました。一方、大規模システムステーション工学(JRR東日本)寄附講座は、中尾和夫客員教授が昨年三月に辞職されて大阪工業大学に移られました。そのため、株式会社日立製作所から吉原郁夫客員助教授をお迎えしました。さらに、十二月一日付けで、電子工学科の島山力三助教授が同学科の教授に昇任されました。また、本年一月、情報処理教育センターから周曉講師を情報工学科にお迎えしました。

以上の異動により、一月一日現在で電気・情報系学科の教授、助教授、講師の運用現員は以下の通りです。

工学研究科電気・通信工学専攻
(電気工学科)

教授：阿部健一(学科長)、豊田淳一、佐藤徳芳、犬竹正明、櫛引淳一、一ノ倉理、島本進(客員)

助教授：松浦裕司、飯塚哲、大沼俊朗、安藤晃、金井浩、松木英敏、斎藤浩海、郭海蛟、竹内伸直、吉澤誠、阿部敏士(客員)、吉原郁夫(客員)

(通信工学科)

教授：阿曾弘具(学科長)、中村信良、

澤谷邦男、宮城光信、清水孝一(併任)
助教授：中野真一、木幡稔、馬場一隆、山田顕

講 師：田中治雄
工学研究科電子工学専攻
(電子工学科)

教授：大見忠弘(学科長)、内田龍男、高橋研、塩川孝泰、川又政征、星宮望、島山力三、吉野勝美(併任)、柴田直(併任)

助教授：莊司弘樹、花泉修、Georgi Soranov、二見亮弘、小谷光司(併任)

情報科学研究科
(情報工学科)

教授：山本光璋(学科長)、堀口剛、海老沢丕道、丸岡章、龜山充隆、伊藤貴康、西関隆夫、樋口龍雄、根元義章

助教授：福井芳彦、羽生貴弘、青木孝文、加藤寧、鈴木光政、中尾光之

講 師：藤木澄義、阿部光衛、周曉

四学科長で構成している電気・情報系運営委員会の運営委員長は大見忠弘教授です。今年度から、各学科長がそれぞれ所屬する専攻の主任を兼ねることに致しました。電気・通信工学専攻は他の専攻に比べ規模が大きいので、電気工学科、通信工学科の学科長二人がともに専攻主任を兼ねております。

昨年三月の電気・情報系の卒業生は二百六十六名です。また、大学院工学研究科および情報科学研究科博士課程から、前期課程百六十一名、後期課程四十九名が修了致しました。四月には新たに学部学生(三年次)二百六十三名(編入学者十一名を含む)、大学院前期課程百六十四名および後期課程六十六名の新生を迎えました。このなかには大学院重点化に伴う社会人入学制度による社会人大学院学生二十一名(前期課程一名、後期課程二十名)が含まれております。また、以上のほか、十月に前期課程二名、後期課程八名の新生(十月入学)が加わりました。

最後にになりましたが、会員の皆様の益々のご健勝とご発展をお祈り致します。
(阿部健一 記)

電気通信研究所の近況

会員の皆様にはますますお元気で活躍のこととお慶び申し上げます。電気通信研究所の近況をご紹介させていただきます。

平成九年一月一日現在、電気通信研究所は、沢田康次所長はじめ、教職員一五六名（うち教授二一名、客員教授二名、助教一一名、助手三七名、COE外国人研究員二名、COE非常勤研究員三名、技官一九名、COE研究支援推進員七名）、日本学術振興会特別研究員三名、受託研究員二五名、内地研修員九名、研究生一二名（うち外国人二名）、学部学生七七名（うち留学生一名）、大学院生一九三（うち留学生三二名）の総勢四七五名を擁しております。

前回の報告（平成八年二月一日）の後、以下のような人事異動がありました。
平成九年三月には、フオノンデバイス工学研究分野の竹内正男助教が玉川大学教授として転出されました。四月には、杉田恒教授が情報記録デバイス工学研究分野に、フランシー・レネ教授が分子電子工学研究分野に、中條渉助教が電磁波伝送工学研究分野に、井上光輝助教がスピントロニクス研究分野に着任されました。また、六月には遠藤哲郎講師が固体電子工学研究分野の助教に昇任され、十月には長康雄助教がフオノンデバイス工学研究分野に着任されました。

以上の異動により一月一日現在で、各研究分野の専任教授、助教、講師は以下のようになっています。
ブレインコンピューティング研究部門：情報通信システム研究分野（白鳥則郎教授、木下哲夫助教）、情報記憶システム研究分野（中村慶久教授）、音響情報システム研究分野（曾根敏夫教授、鈴木陽一助教）、生体コンピューティングシステム研究分野（矢野雅文教授）、ブレインコンピューティングシステム研究分野（沢田康次教授、佐野雅己助教）、超伝導コンピューティングシステム研究分野（山下努教授、中島健介助教）

物性機能デバイス研究部門：固体電子工学研究分野（舛岡富士雄教授、遠藤哲郎助教）、分子電子工学研究分野（フランシー・レネ教授、末光真希助教）、スピントロニクス研究分野（荒井賢一教授、山口正洋助教、井上光輝助教）、プラズマ電子工学研究分野（蝦名敦子助教）、情報記録デバイス工学研究分野（杉田恒教授、村岡裕明助教）、光電変換デバイス工学研究分野（潮田資勝教授、上原洋一助教）

コヒーレントウエーブ研究部門：電磁波伝送工学研究分野（米山務教授、中條渉助教）、極限能動デバイス研究分野（横尾邦義教授、三村秀典助教）、テラヘルツ工学研究分野（水野皓司教授、ベイ鍾石助教）、応用量子光学研究分野（伊藤弘昌教授、谷内哲夫助教）、光集積工学研究分野（川上彰二郎教授）、フオノンデバイス工学研究分野（山之内和彦教授、長康雄助教）、電子音響集積工学研究分野（坪内和夫教授、益一哉助教）

超高密度・高速知能システム実験施設（施設長・水野皓司教授）：原子制御プロセス部（室田淳一教授、松浦孝助教）、超高速電子デバイス部（大野英夫教授）、知能集積システム部（中島康治教授）

評価・分析センター（センター長・荒井賢一教授、庭野道夫助教）
付属工場（工場長・横尾邦義教授）
通研は、平成六年に共同利用研究所として改組し、全国で唯一の情報通信に関する国立大学付属研究所として、高度情報化社会の実現に向けての社会的要請に応え、世界に卓越した研究拠点となるべく日夜研鑽しております。開かれた共同利用研究所として、全国の国公私立大学や民間企業の研究者との共同プロジェクト研究の公募を行い、今年度は二〇件の共同プロジェクト研究が進められています。

平成九年五月九日には、関係各位のご援助のもと、付属「超高密度高速知能システム実験施設」の新棟落成式を盛大に挙行することができました。本施設はこれまでのウルトラクリーン基盤技術など国内外に例を見ない技術を有していた「超微細電子回路実験施設」を改組し設備を充実させてきたものであり、今後この施設が全国共同利用研究所としての共同利用プロジェクトの中核施設となり、多くの研究成果を挙げることを期待されています。

また、現在研究所のシンボルマークの作成を検討しており、電気通信の研究において伝統ある当研究所を世界のCOEとして国際的にアピールしてゆくことを企画しています。今後、これまでの諸先輩の輝かしい研究成果を引き継ぎつつ、最先端の研究課題に取り組み、新しい科学・技術の創造、発展と後進の育成に貢献できるよう所員一同邁進して参る所存です。同窓会の皆様には、これまでと変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後にになりましたが、会員の皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。
追記：通研の活動を内外にアピールするホームページのアドレスは次のとおりです。各研究分野のホットな情報には是非一度アクセスしてみてください。
(http://www.nec.tohoku.ac.jp)
(山之内和彦・谷内哲夫記)

支部便り

北海道支部

支部長 廣川 勇 司

春の青葉工業会北海道支部の総会は、平成九年六月十九日（木）共済サロンで開催されました。総会に先立ち、北海道ユニコム株式会社取締役システムソリューション第二部長 米田穂積（電子四十六年卒）氏に「インターネットとデジタル化」と題して記念講演をいただきました。総会では、仙台に帰郷された松本前支部長の後任として鍋田宗三郎氏（工専昭十一年卒）の就任が万場一致で決まりました。本部からは、青葉工業会会長代理星宮望工学部教授と、本部事務局長代理加藤美智子様の両氏をお迎えし、最近の工学部の活動状況についてお話をいただき、また懇親会では、出席者全員の記念写真と歌ありトークありの賑やかな会を持つことが出来ました。
秋の平成九年度東北大学北海道同窓会連合会総会は、平成九年十一月二十八日（金）東京急いで開催されました。これは全学部の北海道在住の同窓生が一堂に会するもので全道各地から約一三〇名が参加しました。本部から来賓として東北大学総長補佐小山貞夫氏を

お迎えし、最近の東北大学の状況と将来構想をお話しいただき興味深く拝聴いたしました。総会に先立ち北海道大学法学部教授厚谷裏児氏に「最近の二つの課題」と題して北海道の情報公開と大規模小売店舗規制について記念講演をいただきました。懇親会では古い友人との再会や新しい友人との会話等大いに盛り上がりました。
今年の北海道は、「時のアクセスメント」が流行語に選ばれたり、サッカーのコンサドーレ札幌がJリーグ入りしたことを明とすれば、一次産業の不振や北海道拓殖銀行が北洋銀行に営業権譲渡するという衝撃的な事態になり、正に暗一色で暮れようとしています。こんなときこそ全員でがんばってこの難局を乗り越えようと思っております。

東北支部

支部長 松本 保 男

平成八年度支部総会は、三月三日会員四十六名の出席のもと仙台ガーデンパレスで開催されました。総会には中鉢支部長の挨拶の後、議事に入り九年度支部役員として支部長に松本（東北電力）、幹事に大学院工学研究科の山田助教と電気通信研究所の益助教が選出されました。
懇親会には、ご多忙にも拘らず佐藤同窓会会長、城戸副会長そして桂、西澤、竹田、野口、高木の各名譽教授にご出席いただき、先生方からスピーチをいただくなど大変楽しいひとときを過ごしました。
同窓会新入会員歓迎会は、東北大学の卒業式当日の三月二十五日に電気系大講義室で卒業祝い会と併せて開催し、三百十名の学部卒業生および大学院修了生の入会を歓迎しました。
祝賀会では、電気系学科長、専攻主任代表の豊田教授並びに電気通信研究所長の沢田教授からご祝辞をいただき、中鉢教授のご発声による乾杯で卒業をお祝いしました。引き続き歓迎会では佐藤同窓会会長から同窓会への入会歓迎と励ましの言葉が送られ、続いて卒業生並びに大学院修了生の代表から研究室生活の思い出や指導への感謝の答辞があり、最後

に中村教授の万歳三唱で門出をお祝いしました。

支部総会で西澤前総長が挨拶のなかで東北大学を取巻く諸問題や大学改革の課題等に触れられました。今日日本全体のシステムとして個人のライフスタイルまで変革を求められる状況のなか卒業生修了生の人達には母校建学の精神を踏まえ、厳しい時代を乗り越える新しい道筋を切り開いて頂きたいと期待する次第です。

最後に、同窓会便りにつきましては、本年度は山之内教授が編集委員長をつとめられ、同窓会本部との連携のもとに編集を行って下さることを報告いたしますとともに、工学部工学研究科における大学院重点化施策の一層の成果と会員の皆様のご健勝を心からお祈り申し上げます。

東京支部

支部長 原島 進

東京支部では、今年度も例年通り「産官学フォーラム」「企業間ネットワーク交流会」、および本部と共催の「総会」の三行事を開催しました。

平成九年二月七日(金)に「第八回産官学フォーラム」が仙台ホテルで開催されました。今回のテーマは「二〇〇〇年に向けての大学研究・教育のありかたについて」とし、産：七十名(東京支部二十一社、関西支部二社、東北支部二社)、官：一名、学：四十三名 合計百十四名の出席をいただきました。はじめに西澤潤一前総長から特別講演をいただきました。引き続き官界から通商産業省工業技術院の石黒義久地域技術課長、産業界からは私、大学からは樋口龍雄情報科学研究科長がそれぞれ講演を行いました。また、学生の就職状況については、豊田淳一教授から説明をいただきました。

六月二十日(金)には、「第六回企業間ネットワーク交流会」が東京五反田「ゆうぼう」とで開催されました。講師は日本国際通信(株)の鈴木行三副社長(昭和三十一年通信卒)にお願いし、「諸君、名刺で仕事をするな」と題してご講演をいただきました。当日は折か

らの台風の襲来を受け、当日欠席者が二十名と多かったのは残念でしたが、三十五名の出席をいただき、大いに盛り上がりました。

九月十二日(金)には、「総会」が恒例の東京神田「学士会館」で、本部と共催で開催されました。先生方二十二名、一般百三十名合計百五十二名の出席をいただきました。恒例の特別講演は東京オリピックに出場の経歴をもつ横溝三郎氏(松下通信 女子陸上部監督)から「私とスポーツ」と題したスピーチマンならではの興味深いお話を伺いました。総会後、懇親会が開催され、旧交を温めました。

本総会において東京支部の平成十年新役員として支部長に吉田章氏、副支部長に内田喜之氏、幹事に小林明夫氏、副幹事に大沼崇氏が選出されました。新役員による平成十年度同窓会東京支部活動へのご支援をよろしくお願い致します。

東海支部

支部長 藤井郁雄

東海支部では、毎年恒例となっている「東北大学電気系同窓会東海支部 第二十一回総会」を、去る七月四日名古屋駅前ホテルサニールト名古屋において盛大に挙行政致しました。

名古屋特有の蒸し暑い気候の中、仙台からご来賓として、佐藤利三郎先生、山之内和彦先生をお迎えし、五十二名の出席者の元、幹事会社の三菱重工佐藤隆氏(電子四十八年)の司会で進行。幹事長の中部日本放送松倉英樹氏(電気三十八年)の開会の辞、支部長(中部精機藤井郁雄：電気三十三年)挨拶と続き、名商大教授本田波雄先生(通信十九年)の乾杯で祝宴に移りました。祝宴の中、山之内先生からは同窓会本部の近況、佐藤先生からは来賓の言葉として、ユーモアを交えながら、これからの大学のあるべき姿を説かれ、出席者一同久しぶりに講義を聴講した思いとなりました。更に、歓談中、出席者の中から任意にスピーチをお願いし、大学関係者、企業関係者それぞれが近況を報告し合いました。

年に一度の集まりのため、参加者同士仕事や近況の話で談話が盛り上がり、一部スピーチが聞こえない程でしたが、時間の立つのも忘れ楽しい会となりました。

懇談の後、次回の幹事紹介と挨拶があり、幹事会社としてヤマハの星十郎氏(通信三十六年)を紹介、「次回の総会は浜松で」の合言葉で、再会を誓い合いました。終わりに全員で「青葉もゆる」を合唱し、名工大教授池田哲夫先生(通信博四十一年)の閉会の辞で会を終えました。

最後に、諸先生並びに本部からの一層のご指導をお願い致しますと共に、東北大学の発展と会員の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

関西支部

支部長 津藤正信

平成七年一月の阪神大震災から三年を経過し、阪神地方は完全復興へ向けて大きく邁進しております。平成九年は忌まわしい事件もありましたが、一方で明るい話題も多々ありました。その一つとして大阪市が二〇〇八年の夏季五輪の国内立候補都市に選ばれ、市がオリンピック局の組織化を計画するなど、五輪という経済効果の大きい巨大大事業へ向けてスタートしております。またローカルな話題としてJRR東西線の開業があり、奈良方面の学研都市線および大ベットタウン三田方面の宝塚線の輸送力強化と合わせて大阪都心への輸送路が飛躍的に整備されました。

さて、関西支部においては新たに下名が支部長を引継ぎました。平成九年の支部活動はあまり活発ではありませんでしたが、六月七日には大阪中央電気倶楽部において平成九年度青葉工業会第四回通常総会が開催され、当支部からも多数の方々の参加がありました。記念講演では仙台より東北大学阿部総長をお迎えして「東北では今」と題するお話があり、東北地方の近況、特に近年たくさんの新しい大学が設立されていることをお聞きして、時代の大きな変遷を感じた次第です。ところで昨今の環境問題に対しては各企業においてISO一四〇〇-の取得等自主的な

近況報告

遠藤 充

(松下技研 平成三年 電気及び通信修了)



私は平成三年に曾根研究室で修士課程を修了後、松下技研株式会社に入社しました。学生時代から、現在に至るまで、音声認識技術の研究・開発に携わってきました。その中で私の担当は、音声認識から単語認識、文認識へと、段々、入力として自然なもの、技術的に総合的なものへと移行してきました。

音声認識技術は、最近になってようやく市場に出始めた技術です。例えば、最近のカーナビゲーション・システムでは、地名を発声するだけで、行き先を指定することができるようになっていきます。一方、SFの世界では、コンピュータやロボットと人間が、当たり前のように会話をしています。しかし、技術的には、まだまだギャップがあり、このギャップを埋めて、フィクションを現実のものにできるような、頑張っていきたいと思っております。

最後に、東北大学電気系同窓会の今後の発展と会員の皆様のご活躍をお祈りいたします。

益子 洋治

(三菱電機・昭和五十二年電子修士修了)



今、日本経済は不透明な状態ですが、私が三菱電機に入社しましたのも、一九七六年の不景気時期直後の一九七七年です。入社して最初に配

属されたのは、現在のULSI開発研究所の前身で発足したのULSI開発センターでした。そのときLSIという言葉がICの一種であるということも全く知らずに赴いていました。ここで、半導体の評価・解析技術を担当するグループを希望したのが、長年この分野に根を降ろすきっかけになりました。その当時はまだ斬新だった走査型オージェ電子顕微鏡を皮切りに、さまざまな分析・評価装置を扱いつつも、LSIの構造評価や故障解析を行って来ました。最初は評価装置の操作技能において、職人芸の世界に浸っていましたが、LSIの微細化・高集積化に伴い、それもままならず、すぐに個人技能の届かぬ世代が来てしまいました。LSIのデザイナーが一枚ミクロンを切り始めた頃、LSI上の任意の微小領域を手にとるように扱えないかという点で、集束イオンビーム(FIB)をLSIの評価に初めて応用しました。近年、評価部門から、ULSIの多層配線プロセス技術開発担当するグループに移り、新たな興味とともに、評価する側から作り出す側へと、もの見方の切り替えをしておりましたが、つい最近、再び呼び戻されて、評価解析部門の運営を任せられることになりました。既に、創るのも、それを計測・評価するのもしりぎりになりつつあるLSIではあるが、新たな気分と視点で評価技術の在り方も考えていこうと思っています。

さまざまな活動の場でも、多くの東北大学の卒業生の方々に現役の先生方のご活躍

を目にし、また、お会いできる機会が多いのも嬉しい限りです。東北大学同窓会の皆様の益々ご活躍をお祈りいたします。

長田 眞

(協和エクシオ 昭和四十年 電子卒)



私は昭和四十年に菊地研究室を卒業し、NTTデータ通信を経て、平成四年協和エクシオに移り現在同社

北海道支店に勤務しております。

電話公社・NTT時代は約三分の一が電話部門に属し、申し込んですぐつく電話いわゆる積滞解消を目指し、電気通信設備の拡充整備計画の実行にあたりました。他の三分の二がデータ通信部門で、米国防務などもしてきました。電話公社仕様のコンピュータシステムDIPSについて、現業部門の個別システムへの導入のための技術開発調整、およびDIPS一段落後は、汎用コンピュータとネットワーク機器による金融産業関連各種システムのインテグレーション業務に携わって来ました。公衆通信用のパブリックネットワークと、個別事業体のプライベートネットワークの両者に係わり、それぞれの比較特質が強く印象に残っています。

現在の会社では、NTT、NCCなど電気通信事業者の通信設備の建設工事を主力事業としております。通信サービスの競争の激化に比例して一層のコスト削減、工事のソフト化など新技術への対応、そして特に重要なこととして公衆通信を一時たりとも中断させないための工物品質の確保、などが今の主課題です。また、これまで培ってきたノウハウを活かし都市、環境関連事業の開発などにも取り組んでいます。同窓会の会員皆様方の益々のご健勝、ご活躍をお祈り申し上げます。

田丸 祐史

(中部日本電気ソフトウェア 昭和三十八・電気修士了)



私は昭和三十八年に八田研究室で修士課程を修了後、フルブライト留学生として米国立イリノイ大学大学院で学ぶ機会を得ました。

修了二年の夏、精密の川本信彦君(現ホンダ社長)が下宿に来て、フルブライト試験を一緒に受けようと言われたのが、運命の分かれ目でした。

帰国後、八田先生からお前は白米の架け橋になれと言われヒューズ社とNECの合併で出来たの日本アビオニクスに入りました。丁度、社を上げて防衛庁のバジシステム建設の真最中で、当時日本では珍しかったシステムエンジニアの卵としてヒューズ社の技術者達と仕事をしました。その後、七六年に部門ごと新設日本電気ソフトウェアの母体となり、以後宇宙開発から科学技術計算、汎用アプリケーション、製造業・流通サービス業システムなど多方面のシステム構築にかかわりました。現在、名古屋在住七年目ですが、嘗て信長、秀吉、家康の三英傑活躍の地で、密かに天下を狙っています。

最後に、皆様のご健勝をお祈りします。

叙 勲

左記の方々叙勲をお喜び申し上げます。

- 松本 友正 勲三等旭日中綬章 (平成九年五月、通十九)
- 飯沼 一浩 紫綬褒章 (同、通三十六)
- 高橋 正 勲二等瑞宝章 (平成九年十一月、通十九)
- 佐藤利三郎 勲三等旭日中綬章 (同、通十九)
- 八島 俊章 藍綬褒章 (同、通三十)

計 報

左記の方々のご逝去を悼み、謹んで冥福をお祈り申し上げます。

平成8年9月18日	増沢 潤一
平成9年1月3日	釘本甲子男
1月8日	樋口 重孝
1月18日	吉田 恵一
4月5日	伊藤 匡四郎
4月7日	式場 英
4月9日	松田 一康
4月14日	高坂 知至
4月27日	前田 三郎
5月6日	金子 晋
5月31日	六戸 満
6月7日	池上 恒男
6月12日	大崎 昭三
6月28日	井上 俊雄
7月19日	高橋 良一
7月22日	石川 謙三
8月11日	大沼 完之

編集後記

二十一世紀を目前にして、金融破綻や景気回復の遅れ、業界内でのリストラなど、先行きに対する不安感、不透明感が漂っております。このような時にこそ、産官学の各界で活躍される東北大学電気・情報系同窓生の皆様が持てる力を発揮し、科学技術の推進を通じて明るい未来を切り開いていかれることを念願いたします。

お忙しい中、ご執筆くださいました方々に心よりお礼申し上げます。(山田 頤 記)

「同窓会便り」編集委員会

- 委員長 山之内和彦 (34 通)
- 副委員長 阿部 健一 (39 電)
- 委員 佐藤 健一 (35 電)
- 米山 務 (34 通)
- 中村 健良 (41 通)
- 竹内 興二 (39 通)
- 飯塚 哲 (51 通)
- 佐野 雅己 (52 子)
- 山田 頤 (49 通)
- 益 一哉 (現教官)

- * 東北大学電気通信研究所
- ** 東北大学大学院工学研究所
- *** ㈱YRP移動通信基盤技術研究所